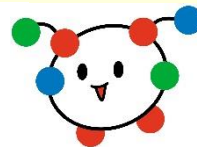


教育センター研修だより



南砺市教育センター

南砺市教育講演会

下記の通り、南砺市内小・中学校の先生を対象に、南砺市教育講演会を実施しました。

- | | | | |
|-------|--|--|--|
| 1 日時 | 平成30年8月10日（金） 13:30～16:30 | | |
| 2 会場 | 井波総合文化センター 「メモリア・ホール」 | | |
| 3 参加者 | 南砺市小中学校教職員・教育委員会 約250名 | | |
| 4 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 開会の挨拶 南砺市教育委員会 教育長 高田 勇 ・ 国内長期研修報告 南砺市立吉江中学校 教諭 川島 正樹 ・ 講演 <ul style="list-style-type: none"> 演題 プロ教師の「アクティブ・ラーニング」はここが違う
—授業改善と学力向上のポイント— 講師 関西外国語大学 英語国際学部 教授 中嶋 洋一 氏 ・ 閉会の挨拶 南砺市小学校長会 会長 山田 誠 | | |

【国内長期研修報告】

「ICT活用による授業の工夫」

～タブレットPCと協働学習支援システムを活用した授業の実践～

実践の概要 ①一人学び：プリントで考える



②学び合い：班で話し合い、iPadでまとめる



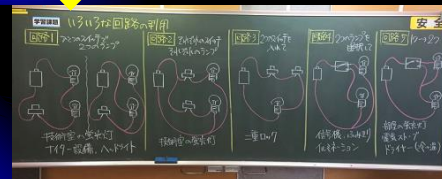
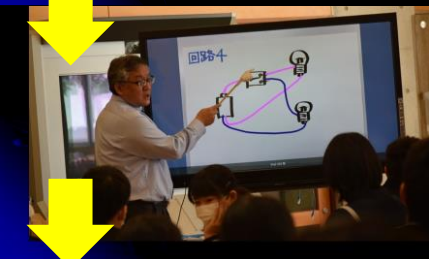
③発表：電子黒板で共有し、黒板でまとめる



発表では、電子黒板に、回路1から順番に「iPad」の画面を送信させ、9グループの考えを比較しながらまとめた。

参加者の感想より

- ・ 研修報告を聞いて、自分も積極的にICTを活用した授業を考え、実践していきたいと思った。
- ・ やがてICT機器が拡充され、自由自在に使うことができるようになったときに、しっかりと意味のある使い方ができるようにしていきたいと思った。



電子黒板では、前の画像が消えるので、電子黒板を使いつつ、授業のまとめは黒板に板書した。

【講演】

- 「目的」と「目標」を明確にしてから、「戦略」（変えない）「戦術」（臨機応変に変える）の違いを意識した授業づくりをしたい。
- Involveさせる（当事者にする）ことで自分の課題にすれば、自ら学ぶ。
- 授業では「learn」（できた〔実際に自分の力でできる〕こと）を目指す。
- 指導と活動のバランスを大切にする。本時のゴール（評価規準）は、教師がまとめて終わるのではなく、子供自らの言葉で語らせる。
- ゴールを単元や授業の最初に示しておく。そして、現在は、全体のどの部分なのかを認識できるように意味付ける。
- 負担ではなく、負荷となるような「ゴール」を設定し、そこから緻密に逆算をして、早めに準備をする（見通しを与える）ことで子供たちが育つ。（授業、行事等）
- 「最後はどうなるのか（どんな力が付けばよいのか）」「具体的にどうなればよいのか」を考え、適宜、俯瞰をしながら「行きつ、戻りつ」をするのが私たちの仕事である。
- 自己流ではなく「正しいやり方」の指導が必要である。例：日本語にはない発音/舌や歯の位置の動画
- 「テンポ」（「2分30秒」子供が集中できる限界の時間、問いかけて「間」を取る）と「リズム」（静の活動と動の活動）のバランスが取れた授業展開を心がける。
- 学校の使命は、教職員の集団が同じベクトル（子供の幸せ、彼らの笑顔が見られる授業）を向き、互いの「知恵」を生かして、「協働作業」を「互恵学習」にすることである。
- 教師が「やろう」「やりたい」と思った瞬間、子供に「限りない可能性」をプレゼントできる。自分に自信がない大人は「無理」「難しい」と線を引き傾向がある。また、教師の苦手意識（道徳が苦手、総合的な学習の時間が苦手）はクラスの子供にそのまま浸透する。
- 自身の3度の経験から、「荒れ」を克服できたのは「生活指導」ではなく、温かい人間関係がある学習集団を母体とした心の触れ合う授業であった。授業の中で、「経験を通して自信を付ける」「自己実現を促す」「関わり合う中で認め合う」といった本来の「生徒指導」を心がけたい。
- 教師の方で、「はい、正解。次」と切ってしまうのではなく、子供が自ら発信できる場をつくり、「あなたは どう思う」「それはなぜ」「他の人は どう」とつなげていくこと、「おもしろい考えだね」「なるほど、それもありえるね」と、一人一人にいていねいにコメントをすることで、子供たちは「つながり」を大切にするようになる。授業とは、地道な「学級づくり」である。
- 教師は、言葉をつなげ、人をつなげる役割を持っている。つながろうとする大人は、子供にとって魅力的なモデルになる。
- 教師の「読み取る力」「感じ取る力」が、「他と関わる力」をつくる。教師は「言語力」を高め、子供の感受性を引き出すこと、豊かな「言葉」のある教育を目指し、言葉や相手を大切にしたい。



参加者の感想より

- ・ 全ては、最初にゴールを明確に設定することから始まると思った。子供たちに考えさせたいと丁寧にやってきたことが、逆に思考力を低下させていたのかと思うと、反省すべき点がある。教材研究をがんばっていききたい。
- ・ 「何のために活動するのか」を子供たちに伝えるのと伝えないのとでは、子供の思考に大きな差が生まれると感じた。子供たちが何のための活動かを考え、意味付けていく授業をしていきたい。
- ・ 「活動があって指導がない授業」「説得があって納得がない授業」「学習指導案に対して授業進行案」等、2つのタイプの授業が対比された。「子供の脳が働いているかどうか」という観点で授業を考えていくことが大切だと思った。もう一度、自分の授業をその観点で振り返りたい。
- ・ 「子供が脳動的にlearnするには、どのように指導すればよいか」「子供を自律的学習者にするためには・・・」などを常に考えながら、子供たちと関わっていききたい。「この子供はできない。だめだ」などと思うことは、勝手な決め付け、思い込みでしかない。子供を信じて、子供のための教師でありたい。
- ・ 様々な例を通して、「知識を覚えさせる」授業ではなく、子供が「学びたい」と望むような展開が必要だと改めて感じた。教材を新たに開発することばかりではなく、教科書をよく読み、発問を工夫するだけでも、十分子供の意欲を引き出すことができると感じた。
- ・ 「自分の今の授業はどうだろう」「目の前にいる子供たちにどう伝えられるだろう」と考えさせられた。できないのは、自分への言い訳であると思った。脳がアクティブに働くような授業ができるように、ゴールを描いて始めていきたい。
- ・ 物事には見通しが大切だということを改めて感じた。ゴールをイメージして準備や仕掛けを考えていくと、筋道の立った分かりやすい授業が構成できるのだと思った。同時に、目の前の子供の様子を見ながら、柔軟に対応していくことも大切だと思った。Learnとstudyのバランスをとるのが最も難しく、大切だと感じた。